



T E N S H I C O L L E G E

## 「2016年4月 大学院で保健師教育をスタートします！」

大学院看護栄養学研究科  
看護学専攻主任 教授 吉田 礼維子

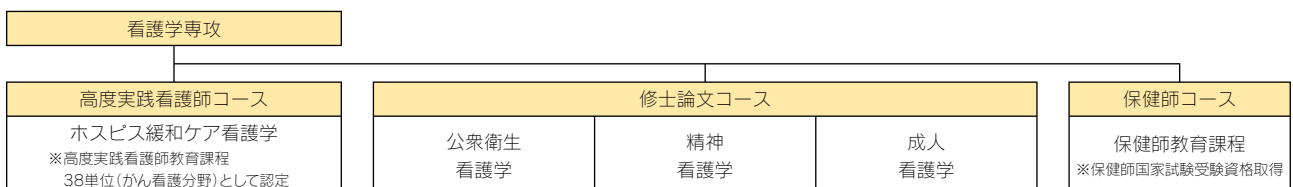
疾病構造の変化や少子高齢化、医療の高度化により、看護の役割は拡大し、専門性の高い知識と実践力を備え自律して行動できる看護職が求められています。また、地方分権の進展や複雑化する社会において健康格差が拡大し、保健師に求められるニーズも多様化し、これまで以上に高度な専門職としての基礎教育が求められるようになりました。これらの変化を受けて保健師助産師看護師法が改正され、保健師教育課程は看護系大学の卒業要件からがはずされ、各大学にその位置づけの選択が任されました。本学においても様々な側面から議論を行った結果、2012年度入学生より学部では看護師教育に特化し、保健師教育は大学院に移行することを決定しました。

そして、2016年4月、大学院看護栄養学研究科看護学専攻に保健師コースを開設します。

北海道は広域かつ小規模な自治体が多く、医療機関の偏在、寒冷積雪など高齢過疎の問題は深刻で、住み慣れた地域で生き続けることが難しい現状にあり、早急に取り組むべき課題は山積しています。住民の生命と生活を護り健康な地域を創るために、住民や保健医療福祉の関係者と連携して地域ケアシステムを構築する保健師の役割は大きいと考えます。地域の複雑困難な課題に立ち向かっていくために、保健師には「個人・家族を支援する力」と地域の課題を分析し住民とともに解決していく「地域を支援する力」の両方の実践力が求められています。大学院では、人間や社会、健康を多面的にとらえるための知識、公衆衛生看護に関する知識・技術を体系的に学び、理論と実践を統合させ、現場の課題を探究できる分析力・研究力を修得します。また、キリスト教的人間観を基盤とした倫理的判断や行動ができ生命に寄り添う支援ができる人材を育成します。保健師教育は、養成校から大学、大学院へと移行しつつあり、本学においても、短大専攻科から、大学そして大学院教育へと変遷してきました。健康格差社会である現代社会のニーズに対応できる高度な実践力を身につけ、地域に根差した活動ができる保健師の養成は、本学に期待される使命と考えます。

健康や疾病予防に関心があり、人々が望む生活が続けられるように、まちづくりまで視野を広げた活動をしたいと思う方、物事の全体を見渡し本質を見抜き、ねばり強くあきらめずに課題に向き合うことのできる保健師を目指して本学で学んでみませんか。保健師になりたい、公衆衛生看護を学びたいと考えた人たちが、経済的理由で進学を断念することがないように、奨学金制度の充実や学習支援体制を検討する必要があると考えています。

看護学専攻には、他にも修士論文コースと高度実践看護師コース（ホスピス緩和ケア看護学）があり、「がん専門看護師（CNS）」（38単位）の教育機関として認定を受けています。CNSは、卓越したケアを提供し、相談、調整、倫理調整、教育、研究を行い、ケアシステムを改善することで看護実践を向上させる役割が期待されています。11名の修了生が活躍しています。



## 天使大学海外研修参加レポート

# 2014年度 天使大学海外研修レポート (研修地:マレーシア)

栄養学科4年 岩井 遥

### ハラール研修を受講して

ハラール関連研修では、豚肉を食べてはいけない、お酒を飲んではいけない、ということだけがハラールではなく、生き方そのものがハラールであると知ることができました。また、日本では感じることのないイスラムの拡大に伴うハラール市場の発展についても学ぶことができました。

近年一部の過激派の行動により、イスラム教への批判が強まっています。マレーシアで出会ったイスラム教の方々は良い方ばかりでしたし、一部の人々のせいで大勢の人が誤解されてしまうことはとても悲しいことだと感じました。ハラールを学び、イスラム教に対する考え方が変わったことが、一番の収穫だったと思います。

日本ではハラール製品が少なく、また和食に使われる調味料にはお酒が使われていたり、ムスリムにとっては、生活しにくい環境だと感じました。そのような環境で現在の自分ができることは、日常でムスリムの方を見かけ困っていたら、手助けすることだと思いました。

ハラールの本質を知ること、食事でより的確な対応ができるようになって感じました。今後管理栄養士として働くうえで、日本で扱っているハラール製品を把握するべきだと思います。

※ハラール:イスラム教の教義に従っていることと判断されるもの。特に、必要な作法どりに調整された食品をいう。

### 看護教育、看護師の役割

Tun Tan Cheng Lock大学は3年制で、6学期制となっており、看護の知識とスキル、看護と健康行動科学、人間ANG広報、通信、IT、プロの開発と管理を学ぶ学校です。成績は定期的に行われる小テスト、ケーススタディ、プレゼンテーション、臨床評価によって決められるそうです。また、大学に隣接しているアスタ病院などで臨床実習を行い、学習を深めることができるシステムになっていました。修了時には卒業証書を授与され、公認看護師(RNS)としてマレーシアの看護協会に登録されます。

卒業後は病院の他、地域保健センター、老人ホーム、企業の保健診療所、保険会社、販売&ヘルスケア製品のマーケティングなど様々な場所で活躍しています。

マレーシアにはイスラム教徒が多く、病院の診察も男性医師が女性患者に触れることができない場合もあるそうです。TTCL大学では約9割が女子学生であり、女性看護師は活躍できる機会が多くあると感じました。



### 管理栄養士の養成、栄養サポートチームの役割など

アスタ病院では栄養士を4人配置しており、患者様に提供する食事は医師の指示のもと行われており、日本とさほど変わりありませんでした。また、給食に関してはサイクルメニューを使用し、選択食も行ってました。選択肢として、肉料理・魚料理に加え野菜料

理があり、ベジタリアンにも対応可能となっているところに日本との違いを感じました。食事はすべてハラールを使用しており、委託会社を使わず院内で調理し、メニューは中華料理、ニョニヤ料理など様々な料理を提供していました。

栄養サポートチームに関しては、栄養士、医師、薬剤師などが加わっており、栄養処方に関しては嚥下食、経鼻栄養、胃瘻、腸瘻、静脈栄養なども取り扱っていました。

### 施設訪問で学んだ点

病院はマルチエスニックで、中国の旧正月に合わせて院内の装飾を変えたり、その他の宗教に合わせていました。マレーシアで初めて院内にプールを設置したり、入院病棟はホテルのような病室を目指して壁紙の色味を暖色にしたりするなど、工夫が施されていると感じました。また、アスタ病院は難民や経済力の乏しい方も受け入れており、医療のあるべき姿を垣間見たような気がしました。

### 修道院を訪問して

修道院ではとても歓迎していただき、楽しい時間を過ごすことができました。聖歌「いつくしみふかき」を歌うと、英語の歌詞、中国語の歌詞、それぞれで歌っていただき、生まれ故郷や言語が異なっても通じるものがあるのだと感じました。マレーシアでおすすめのお土産を尋ねると丁寧に教えてくださり、ガイド本などよりも現地の方の声を聴くことができ、とても参考になりました。



### マラッカ視察をして

マラッカはとても不思議な街でした。キリスト教の教会、すぐ近くには中国系仏教の寺院、隣にはモスクなど、多民族国家を象徴する街並みであったと思います。日本で教会と聞くと、結婚式を行う場所で綺麗で清潔感のある場所をイメージし、礼拝場所であることを忘れていました。教会の中には参拝者の名前が彫られた石などがあり、信仰心の強さを感じました。

### 最後に

今回の海外研修プログラムに参加し、たくさんの人との出会いに恵まれ、素晴らしい7日間を過ごすことができました。現在の国際情勢で海外に渡航するのは不安もありましたが、京王観光(株)の高木さんと先生方、現地ガイドのタンさんに支えられて無事に研修を終了することができました。本当にありがとうございました。この7日間は、私の一生の財産です。

## 学生が海外研修に行く意義

学生部長 栄養学科教授 久保 ちづる

本学では、昨年マレーシアでの研修旅行を実施しています。マレーシアはマレー系、中華系、インド系の人々が習慣や宗教が違ななかお互いを尊重しながら暮らす多民族国家です。1週間という短い期間ではありますが、昨年は16名の学生、そして今年も同じく16名の学生が参加し充実した研修を行いました。研修の目的は異文化の理解、共通言語としての英語体験、キリスト教の理解、看護学と栄養学分野の海外事情の理解、在住日本人の健康管理の実際を知るなどです。天使大学研修旅行でしか行けない場所で研修でしか体験できない内容であることをめざし実現しています。

海外研修に参加することの意義は、学生たちが日本とは違った文化の中で、世界の中にはいろいろな考え方、習慣、価値観があることを自ら体験し大きな刺激を受けることに

あります。そして実際に研修に参加した学生の感想の中に、それらが示されています。「初めて体験することが多く、視野を広げることができた」「マレーシアの人々のやさしさに触れることができ、お互いを知ることが大切であることを知った」「国外から日本を見るときごく恵まれている」「お互いを理解するために英語をもっと勉強する必要があると痛感した」「自国の文化を大切にしながらも日本の良いものを取り入れようとする姿勢に感激した」「自分から働きかける、行動を起こすことが何よりも大切だと感じたなどこれまでと違った視点から物事を考え感じています。研修の体験が、創造性をもった応用力のある、まさに社会が求めている人として成長してゆく糧となります。

若い時にこそ異文化体験に挑戦してください。そして民族や国を問わずお互いを理解しあう努力をすることが自らの人生を豊かにし、そして周囲の人々をも豊かにしてくれるものと思います。



2015年度海外研修は、2016年3月10日(木)～2016年3月16日(水)5泊7日で行い16名の研修生が無事帰国いたしました。

## カトリック医療関連学生セミナー

### セミナーを通して学んだ事

看護学科3年 佐藤 那美

私はカトリック医療関連学生セミナーを通して様々なことを学びました。その学びについて述べたいと思います。

まず、旭川荘の歴史についての講演で特に印象に残ったことは、障がい者についてです。障がい者は「働かずに情けだけでは暮らせない」ということがわかりました。私は、今まで障がい者が理由で働くことができないのは仕方がないことだと思っていました。しかし、それは一種の差別ではないかと思いました。人が生きていくには、働いて社会的役割を果たす必要があると思います。働くことは、その人の生きがいにもなりますので、障がいがあっても働くべきだと思いました。また、障がいを持つ人は働くことに誇りを持っていることもわかりました。私は大学を卒業して就職し働くことは当たり前のことだと思っていましたが、働くことができることに感謝しなければならないと感じました。日本では障がい者の働く場所は確保されていますが、中国ではまだ確保されていないため、これを改善することは今後の課題であることを知りました。また、自立とは障がい者が着替えなどを全部自分自身で行うことではなく、人に手伝ってもらい社会活動に時間を当てることだと学びました。

次に、講演後のディスカッションでは、グループの方々の考えや意見を聞き自分にはなかった考え方を知り、学びを深めることができました。そこで話し合ったテーマは、「日本は世界で一番の長寿国であるのに死の質が下位であるのはなぜか」です。

話し合いの中で拳がった考えに、今まで日本では「病気を治すことに頭がいっぱいで死をどのように迎えるか」を考える余裕がなかったのではないかとこのころがありました。私はそれを聞いて大学で臓器移植について話し合った時のことを思い出しました。その時、日本人ははまだ死について避ける傾向があることや話し合うきっかけがないという意見が多くありました。しかし、将来医療者として働くものにとって死に向き合う場面は多く、避けられないものだと思います。そこで、まずは自分の死についての考えを持つことが必要だと思いました。そのためには、最期の迎え方について自分の考えをもつことから始めようと思いました。

今回、私はセミナーに参加して全国の医療学生や医療に携わる方々とかかわることができ、とても勉強になりました。特にディスカッションで、大人の方々の考え方や話のまとめ方が素晴らしく、自分もそのように話すことができるようになりたいと思いました。また、改めて将来の看護師像を考える機会にもなり、このセミナーで学んだ事を忘れずに今後も学んでいこうと思いました。



2016年度のカトリック医療関連学生セミナーは、次の日程で行われます。

日時 2016年8月6日(土) 9:00~7日(日) 12:00 会場 天使大学

興味のある方はどなたでも参加できます。

## 活躍する卒業生

## 南の島の保健師です。



沖縄県粟国村役場

看護学科 2015年3月卒業 木村 絵美

**Q1** 現在の勤務先を志望された理由と、どのような業務に携わって来られたのかを教えてください。

## 【現在の勤務先を志望した理由】

元々沖縄が好きで住みたかったこともあります。大きな市ではなく、あえて小さな田舎を選ぶことで住民と近いかかわりが出来ると感じたためです。

また、全ての業務を行うことで島全体の様子を知ることが出来るのも魅力でした。

## 【過去から現在まで携わってきた業務】

- 親子保健(乳幼児健康診査、親子交流会、クリスマス会、妊産婦支援、赤ちゃん訪問)
  - 予防接種(乳幼児定期予防接種、肺炎球菌予防接種、インフルエンザ予防接種)
  - 精神保健(精神保健巡回相談、断酒会例会活動支援、訪問)
  - 健康増進活動(リズム体操教室、健康相談、特定健診、保健指導、訪問)
- 主なものは以上です。訪問はほぼ毎日行っています。

**Q2** 1日のお仕事の基本的な流れを簡単に教えてください。

| 【時刻】  | 【行うこと】                          |
|-------|---------------------------------|
| 7:45  | 役場へ出勤。課内の机を拭く、メールチェック、一日の予定を確認。 |
| 8:30  | 事務担当と一日の予定を確認し合い、保健師室へ移動。       |
| 9:00  | 来所対応、資料作成、書類整理                  |
| 12:00 | お昼休憩                            |
| 13:00 | 保健師室にて来所対応、資料作成、書類整理            |
| 15:00 | 訪問                              |
| 17:00 | 一日の活動記録まとめ(業務日誌)、明日の行動予定確認      |
| 18:00 | 退勤                              |

**Q3** お仕事の「大変さ」と「やりがい」について教えてください。

沖縄は独特の文化や伝統があり、先祖崇拝として行事を大切にしている点はとても良いところです。行事食や行事に伴うお酒の習慣などが健康に影響を及ぼしています。住民の方々のこのような思い(先祖崇拝)を大切にしながら健康管理のお手伝いをするという点が非常に難しいです。しかし、逆に捉えれば一筋縄にはいかないという点で保健師の力量が試されるので、やりがいも同時に感じています。

**Q4** 天使大学での学びや生活を振り返って、特に印象に残っていること、その中で自分が成長したと思うことを教えてください。

やはりキリスト教関係の授業や行事、戴帽式などが特に印象に残っており、中でも「愛をとおして真理へ」という建学の精神は私にたくさんの学びを与えてくれました。

“愛が無ければ無に等しい”という言葉は今も常に頭の中にあり、仕事をする上で、言うなれば生きていく上で、何よりも大切なことだと日々実感しています。

**Q5** 天使大学の先生、友人、先輩・後輩の印象をお聞かせください。

天使は素直で真面目な学生が多いと思います。

でもそれだけではなく、先生方をはじめとして、ユーモアを持ちあわせの方が多いという印象です。

先生方はどなたも個性が強く、ザ・私大の先生という感じがします(笑)。今もお世話になった先生方に会いに行っています。

**Q6** 業務の中で、天使大学で学んだことはどのように役立っていると思いますか？

Q4でも触れましたが、何よりも大切なものは愛であるという学びが、住民の方々と接していく上で、また困難な事例に直面した時の判断という点で、役に立っていると感じています。



乳幼児検診の様子

**Q7** これからの目標について教えてください。

今後はより一層住民の方々に信頼され、地域で愛される保健師となるよう一日一日を大切に過ごし、自分にしか出来ない保健師としてのキャリアを積み上げていこうと思っています。

又、他のへき地なども経験できたらと考えています。

**Q8** 最後に一言。

沖縄県に限ったことではないかもしれませんが、離島保健師はどこも常に人手不足で、求人はいくらでもあり、大歓迎されます。田舎が好きなお方にはベストな環境だと思うので、離島保健師という選択肢も頭のどこかに入れておいてもらえたらと思います。なんくるないさ～(なんとかなるさ)の精神で、一步を踏み出してみませんか。



家の近くにある海への小道

## 店舗管理業務から 管理栄養士に。



医療法人社団ゆほな会 はやしたくみ女性クリニック  
栄養学科 2011年3月卒業 木村 綾子

**Q1** 現在の勤務先を志望された理由と、どのような業務に携わって来られたのかを教えてください。

### 【現在の勤務先を志望した理由】

医療事務/受付という入口から入ることでクリニックの診療の全体像を理解し、その上で他職種と連携をとりながら管理栄養士として「食」とおして患者様の健康に貢献したいという考えの思いを受け入れてくださるクリニックであったため。

### 【過去から現在まで携わってきた業務】

前職(ドラッグストア勤務)では化粧品担当者として販売と売り上げ管理、店長代行として店舗管理の補佐をしていました。

現在は受付として医療事務をする中で産婦人科の診療内容を学び、栄養指導など管理栄養士業務を行っています。

**Q2** 1日のお仕事の基本的な流れを簡単に教えてください。

| 【時刻】  | 【行うこと】                                                                                                                                                                                  |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 7:50  | 出勤                                                                                                                                                                                      |
| 8:00  | 清掃、開院前の準備                                                                                                                                                                               |
| 9:00  | 受付業務・栄養指導<br><ul style="list-style-type: none"> <li>・電話応対:相談内容に応じて予約をとる。診療内容や薬の処方に関して医師や看護師に確認をとり伝えるなど</li> <li>・会計:金銭授受、次回の予約をとる。</li> <li>・受付:受付をしてカルテをまわす。問診表を渡す。身体計測を促す。</li> </ul> |
| 12:00 | 休憩                                                                                                                                                                                      |
| 13:00 | 受付業務・栄養指導                                                                                                                                                                               |
| 17:15 | 退勤                                                                                                                                                                                      |

**Q3** お仕事の「大変さ」と「やりがい」について教えてください。

仕事の「大変さ」は頑張ったからといって必ず成果が出るわけではないこと、明確な答えがないこと。「やりがい」は患者様に小さくてもプラスのきっかけを作ることができたなと感じたときと、自分の成長を感じた時です。

どんな仕事も大変です。それを乗り越えて初めてやりがいが生まれると私は思います。大変さを乗り越えるためには1つずつ小さなことを積み上げていくことが一番の近道だと感じています。

**Q4** 天使大学での学びや生活を振り返って、特に印象に残っていること、その中で自分が成長したと思うことを教えてください。

天使病院での3週間の病院実習が一番印象に残っています。実習先の管理栄養士の先生に「食事というその方のプライベートな部分を変えようだなんて思うのは横暴だし、栄養指導がうまくいったと思うのは何十年やっていてもほとんどない」と言っていた言葉が今でも心に残っています。

正しいことを伝えるのが良いことではなく、食生活がより良くなるきっかけをつくるのが管理栄養士の仕事で大切なことだと感じました。栄養指導をするときはいつも先生の言葉を思い出します。

**Q5** 天使大学の先生、友人、先輩・後輩の印象をお聞かせください。

天使大学のアットホームな雰囲気が大好きです。

在学中、山部先生に言っていた「卒業後も学生をサポートするのが天使大学です。」という言葉に今も尚支えられています。

在学中仲が良かった友人とは今でも頻りに連絡をとっています、4年生の実習で仲良くなった3人も定期的に集まって実習の思い出話や近況報告などしながら変わらずわいわい楽しんでいます。

**Q6** 業務の中で、天使大学で学んだことはどのように役立っていると思いますか？

実習やグループワークで私が1番大切にしていたことは「何を伝えるか」ではなく「何が伝わるか」ということ。そのために妥協せずとことん話し合いました。その姿勢は今も変わっていません。同じクラスのメンバーはもちろん、栄養学科、看護学科と多くの人達と関わったことで、意見を出し合って皆で一つのものを作り上げる力がついたと感じています。

**Q7** これからの目標について教えてください。

管理栄養士として経験を積み、より多くの人を「食」から豊かにすることが目標です。具体的には現在産婦人科に勤めているので、妊産婦さんの食事のケアや離乳食のサポートをしていきたいと考えています。

そして将来的には管理栄養士の活動の場を広げていきたいです。食事は毎日のことだからこそその専門家の管理栄養士はより身近な存在になるべきだと考えます。そのための第一歩としてクリニックの管理栄養士として頑張ります。

**Q8** 最後に一言。

私は卒業後ドラッグストアに入社し、4年間働いて現在のクリニックに転職しました。管理栄養士として経験を積みたいという気持ちもありましたがそれ以上に接客業がやりたいという気持ちが強く、この道を選びました。4年間懸命に働いて色々な経験をさせてもらい、社会人として自分に自信がつけられた時、管理栄養士として働きたいと考え転職しました。いまではその4年間の経験が自分の強みになっています。

学生の皆さんはこれから進路で悩む機会が出てくると思いますが、その時に一度自分の好きなことややりたいことに目を向けてみてください。管理栄養士は「食」の専門家。「食」は毎日のことですから学んだことが無駄になることは絶対にありません。そしてあらゆる分野で活躍できる資格なので、枠にとらわれない資格の活かし方を考えてみてほしいと思います。

## つれづれ考

本学教職員によるリレーコラム 第九回

## 食べ過ぎには注意が必要

大学院看護栄養学専攻科長 教授 大久保 岩男

我が国には、国民栄養調査参加者を対象とした長期追跡研究としての「NIPPON DATA」が存在する。この研究は厚生労働省研究班により行われているものであるが、最近その息の長い研究から生まれた成果として興味深い結果「NIPPON DATA80」が報告された。1980年の全国国民栄養調査に参加した30～69歳の男女7704人の総摂取カロリーとその後29年間(2009年まで)の総死亡、がん死亡および冠動脈疾患死亡との関連を数年かけて分析している。総摂取カロリーが高い男性では総死亡、がん死亡および心筋梗塞などの冠動脈疾患死亡が高く、女性でも冠動脈疾患死亡が高くなるという結果であった。また、男性でBMIが25(kg/m<sup>2</sup>)以上の肥満者では、25以下の適正体重群に比べて死亡リスクが3倍以上高かったとしている。

この研究から考えると、長生きするためには、とりわけ中年以降の男性では食べ過ぎを避け、総摂取カロリーを2,000kcal程

度に押さえるのが肝要と考えられる。

最近「日本食」に関して、我が国においてまた外国においても関心が持たれていることは周知のことである。現在と比較して、1975年頃の日本食のカロリーや栄養バランスなどが標準的であるとされている。本調査が1980年に行われていることから、日本人の食生活が欧米化した時期とほぼ一致し、肥満やメタボリック症候群が増加してきた時期とも一致することは興味深い。現在、我々の日常生活において、摂取カロリーの取り過ぎが懸念されているが、とにかく食べ過ぎには気をつけたいところである。

天使大学においても、肥満やメタボリック症候群の予防や改善を目指して、栄養指導や運動の指導を行う「天使健康栄養クリニック」を開設して10年になり、それなりの結果が出ているが、この「NIPPON DATA80」のような息の長い研究は大変に参考になり、この研究の参加者や協力した関係者の皆さんに敬意を払うばかりである。また、本学のクリニックの今後をいかに展開するかという点で啓示的に思われる。

\* 本項を執筆するにあたり、滋賀医科大学ホームページの情報提供欄を参考にさせていただきました。

## 学生の活躍

第35回北海道カーリング選手権大会で本学学生所属のチームが優勝しました。

看護栄養学部栄養学科4年の内藤圭美さんが所属するカーリングチーム「ヒト・コミュニケーションズ」が、「第35回北海道カーリング選手権大会兼アルパタ杯カーリング大会」で見事、優勝しました。

今後も応援をお願いいたします。



平成27年度札幌市お弁当レシピコンテスト』の一般市民の部で、栄養学科学生が札幌市長賞、特別賞を受賞しました。

2015年10月に行われた『平成27年度札幌市お弁当レシピコンテスト』の一般市民の部で、看護栄養学部栄養学科1年の針生絵里香さんが札幌市長賞を、栄養学科2年の早川明花さんが特別賞(株式会社北海道日本ハムファイターズ賞)をそれぞれ受賞しました。

今回は、道産食材を使用したバランスのよいお弁当のレシピということで、お弁当の容量、主食・野菜・きのこ・海藻の使用量および、魚を使用して材料費は300円程度などの条件がありました。受賞したお弁当は彩りよく、おいしそうに出来上がっています。応募レシピは札幌市のホームページに掲載されています。

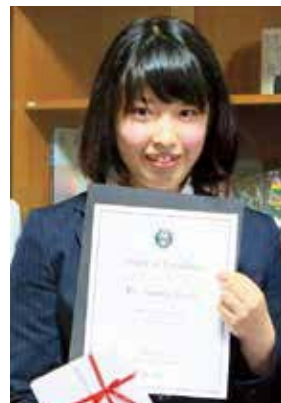


「英文エッセイコンテスト」で1位最優秀賞を受賞しました。

在札幌米国総領事館が主催する「高校生・大学生英文エッセイコンテスト」において、工藤郁佳さん(看護栄養学部栄養学科3年)が大学生部門の1位最優秀賞を受賞しました。2015年7月31日(金)に本学で表彰式が行われ、在札幌米国総領事館首席領事 ジョエレン・ゴード氏から賞状とともに副賞が手渡されました。

今回の英文エッセイコンテストは、4月22日のアース・デーと6月8日のワールド・オーシャンズ・デーを記念し、環境問題をテーマに北海道、青森県、秋田県、岩手県、宮城県在住の日本国籍をもつ高校生と大学生を対象に行われました。

工藤さんは「日本とあなたの街にとって重要な環境問題とは？ 将来への影響は？ あなたができることは？」というテーマについて、「地産地消」とからめた論を展開し、表彰式でゴード首席領事から「切り口が斬新でした！」と高い評価をいただきました。



「地域へ飛び込め!大学生等の就業体験ツアー事業報告会・移住相談会」に本学学生が参加しました。

北海道二十一世紀総合研究所が主催する「地域へ飛び込め!大学生等の就業体験ツアー事業報告会・移住相談会」に青木澄夏さん、加藤由華さん(栄養学科3年)、加藤佑梨さん、坂本星美さん(栄養学科2年)、秋山菜々子さん、川原みなみさん(栄養学科1年)が参加し、北海道内各地で就業体験させていただいた内容の報告を行いました。



## 公開講座

### 2015年度公開講座報告

2015年8月20日(木)～9月17日(木)の5回にわたり、医療、薬、看護の分野から、生活に役立つ情報をわかりやすく解説しました。

| 回 | 日程       | 講演題目・講師                                                      |
|---|----------|--------------------------------------------------------------|
| ① | 8月20日(木) | <b>脳周病と全身疾患</b><br>日本医療大学 保健医療学部看護学科 教授 賀来 亨                 |
| ② | 8月27日(木) | <b>病気と知っておきたい薬の知識</b><br>北海道薬科大学 薬学部薬学科 教授 今田 愛也             |
| ③ | 9月3日(木)  | <b>認知症について学ぼう!! -認知症の正しい理解-</b><br>天使大学 看護栄養学部看護学科 准教授 谷 規久子 |
| ④ | 9月10日(木) | <b>みんなで見守る命の誕生!</b><br>天使大学 大学院助産研究科 教授 園生 陽子                |
| ⑤ | 9月17日(木) | <b>くずりと食品の相互作用 -よい面・悪い面-</b><br>北海道薬科大学 薬学部薬学科 准教授 佐藤 隆司     |

## 大学院助産研究科

### 大学院助産研究科院生が、ニセコ高校で性教育を行いました。

2015年12月4日(金)に、本学大学院助産研究科助産専攻助産基礎分野2年6名が、北海道主催の「次世代の親づくりセミナー」で北海道ニセコ高校1年生に性教育を行いました。このセミナーは少子化対策の一環として北海道保健福祉部子ども未来推進局子ども子育て支援課が毎年行っているものです。院生たちは、子育てや性感染症、男女交際の在り方などについて、スクリーンでの説明や寸劇を取り入れるなど、工夫を凝らして説明を行いました。

この様子は、12月7日(月)の北海道新聞にも掲載されました。



## 大学院看護栄養学研究科

### 看護学専攻保健師コースが保健師養成課程として認められ、指定書が交付されました。

文部科学省に申請をしておりました本学大学院看護栄養学研究科看護学専攻保健師コースについて、2015年8月31日付で保健師養成課程としての指定書が交付されました。

保健師コースは、地域で暮らす人々の健康と生活を護るために科学的根拠に基づき、地域の保健活動に貢献できる存在として、高度な実践力をもち、分析研究力や政策提言に優れた保健師の育成を目的としています。

### 看護学専攻ホスピス緩和ケア看護学コースの教育課程が「高度実践看護師教育課程」として認定されました。

2016年1月29日付で、本学大学院看護栄養学研究科看護学専攻ホスピス緩和ケア看護学コースのがん看護分野26単位教育課程が、一般社団法人日本看護系大学協議会の高度実践看護師教育課程38単位(がん看護分野)として認定されました。

### 本学看護栄養学部看護学科の富川将史助教が、2015年12月に「がん看護専門看護師(CNS)」に認定されました。

これまで、本学大学院看護栄養学研究科看護学専攻ホスピス緩和ケア看護学コースの修了生11名がCNSとして主に札幌市内のがん診療連携拠点病院で活躍しています。

## 地域連携・産学連携

### 今年もイオン・ホクレンとのコラボ弁当を発売しました。

看護栄養学部栄養学科監修による特製弁当「天使と大地からの贈り物“天使のまごころ弁当”」が、2015年9月25日(金)～9月27日(日)の3日間限定で、全道のイオングループ各店で販売されました。

このお弁当は「イオン北海道大収穫祭(協賛:ホクレン農業協同組合連合会)」の企画としてイオン北海道株式会社と天使大学が協力し、北海道産米(ななつぼし)を使用した特製弁当です。具材や味、盛り付け、パッケージデザインには栄養学科の学生の意見が取り入れられており、幅広い世代の方に向けて不足しがちな野菜をたくさん食べていただきたいという学生の想いが込められています。



### 「ひがしく健康・スポーツまつり2015」に本学学生が参加しました。

2015年10月18日(日)、東区つどいむで「ひがしく健康・スポーツまつり2015」が開催され、本学は「天使大の健康塾－食事バランスチェック&血圧測定－」というコーナーを担当しました。

このイベントは東区と本学を含む東区内の大学等の教育機関が「地域連携協定事業」の一環として協力しました。(2015年度から東区連合町内会連絡協議会、東区役所、さっぽろ健康スポーツ財団が主催で、これまでの健康まつりをリニューアルして実施したものです。)

本学では看護学科、栄養学科の学生が、食事バランスガイドを使用した食生活アドバイスや血圧測定を行い、多くの来場者に健康アドバイスを行いました。参加者の方々から、「笑顔がいいですね」と声をかけていただきました。この他に「ウォーキング」、「歯の健康相談コーナー」でも学生達が協力しました。

暖かな秋の1日を地域の皆様と楽しく過ごしました。



### 『2015年度 夕張地域医療体験』に看護学科・栄養学科の学生が参加しました。

天使大学と北海道薬科大学の連携協定にもとづき、2015年度は4名の学生(看護学科4年2名、栄養学科4年2名)が参加しました。

将来看護師、管理栄養士を目指している学生たちにとって、様々な医療職の方々が実践されているチーム医療を学ぶ機会となり、有意義な体験学習となりました。

現地で指導してくれた講師の中には、本学卒業の管理栄養士もいました。



## Love, love, love, love, love

Father Kenneth Gerard Collumkille Sleyman, MM

Tenshi College is my “dream job” because I get to talk about love all the time! I am a nurse faculty member teaching in the Department of Nursing at Tenshi College and I am a Catholic priest so I also teach Religion in the college and conduct Masses, retreats, etc. for the students, faculty and staff. Since I was a child I remember Jesus saying, “to love one another,” but it wasn’t until growing up that I realized why Jesus said it. He said it because people don’t really love one another. Hence, when the Franciscan Missionary Sisters of Mary set out on their mission of teaching by establishing Tenshi College in 1947 they decided to teach about God through love. Their motto was, “through love to truth.” It is a very simple formula.

But honestly I have found teaching love in Japan is a bit complicated because Japanese rarely ever say the word love in normal day to day parlance. Whilst on the other side of our planet in the USA, love is used all the time in conversations. Family members tell one another they love each other multiple times a day and mothers kiss their children before sleeping saying the magic words, “I love you.” Phone conversations between friends usually end with “love you” instead of “goodbye.” Nurses and doctors use the word “love” in conversations about treatment; love is the ambience of care.

Why do I like talking about love all the time? I guess the answer to that question goes back to my childhood where I learned about love. Concerning that, I’d like to quote a favorite saying of mine by Albert Einstein: “Learning is experience. Everything else is just information.” So, I learned love the hard way through experience.

When I was born I had two medical problems. First, my blood type (B-negative) was incompatible with my mother’s blood type (B-positive) so I nearly died a few hours after birth. A smart midwife-nurse Mrs. Smith saved my life by noticing my strange color and she called the doctor. “Dr. Anderson, little Kenny has turned green. I think you better come in and check his condition.” Dr. Anderson came in the middle of the night and gave me multiple blood transfusions to save my life. I stayed in the hospital for 3 months and after that incident I didn’t smile for a whole year. Dr. Anderson thought I had brain damage. I do not remember anything from that experience except that now my favorite color is green.

The other problem I had was in-toeing (pigeon toes)

which required surgery and I had to wear foot-abduction braces until I was 10 years old. My mother took me to rehabilitation every Saturday for 10 years. Ergo, I mostly learned how to love from my mother who fought for me to be normal.



Now I walk fine but it because someone loving loved me back to health. To encourage me when I was a child Mom often would read me bedtime stories about overcoming challenges. One of her favorite stories was *The Velveteen Rabbit* by Margery Williams. It is a story about the love between a little boy and his favorite toy rabbit. The little boy treated the toy rabbit like he was a real rabbit. The little boy took his rabbit everywhere and played so hard with him that he started to lose his shape and not even look like a rabbit anymore except to the little boy who loved him so much. Mom told me that story to encourage me and tell me that to her I am already whole and okay because she loved me.

I think I wanted to become a nurse and then a priest too because of the great love of my mother, of my midwife-nurse Mrs. Smith and Dr. Anderson who loved me back to health. That difficult experience as a child with tough love invigorates me in my teaching our Tenshi College students how to love themselves, how to love their friends, how to love the patients entrusted to their care and how to love God.

For me life has come full circle. I was born and cared for by love and now I get to teach it as an instructor of Nursing and as a Catholic priest at Tenshi College. I love working at Tenshi College it is my dream come true place to work. I think God sent me here and I am very happy now living in a loving place like Tenshi College in Sapporo, Japan.

I guess I have learned that whilst Japanese do not use the word “love” in daily parlance they do “love” as much as people in the USA and like the little boy in *The Velveteen Rabbit* story Japanese’ love is more often showed by actions and presence more than by words. It is a beautiful. Thinking about it our teaching method at Tenshi College closely follows the Einstein methodology of learning love like mentoring and coaching by staff and faculty, and by clinical experience in the hospital with families and patients. Also, our students learn about love through their friendships with classmates during the activities at the college like Songfest, College Carnival, Sports Day, Professional Retreats, Assembly Hours, Chapel Hours, Easter Mass and Christmas Mass experiences built into the yearly curriculum.

Love learning is pivotal to the curriculum at Tenshi College and I am proud to be part of Tenshi College.

あなたの声を  
お聞かせください

天使大学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。  
ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先

〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel 011-741-1051 fax 011-741-1077



天使大学

看護栄養学部／看護学科・栄養学科  
大学院／看護栄養学研究科  
助産研究科(専門職学位課程)

第21号 2016年3月31日 発行 天使大学広報委員会

<http://www.tenshi.ac.jp>